

何を書いたらいいか 「題材」を見つけましょう

古い順にこだわらずエピソードをピックアップ

自分史は、自分が生まれたときから順を追って書く必要はありません。まして、エッセイ集スタイルのコンパクト自分史は、古い順(時系列順)にこだわらず、あなたがどうしても書きたいこと、ひとにぜひ読んでもらいたいことをピックアップしましょう。掲載の順番はあとできめればいいのです。

書きたいことが山ほどあるという方であれば、頭の中にある題材案を、具体的に書き出してみることから始めましょう。

一方、何を書けばいいのか、見つからない人も多いはず。そんな方は、まずカンタンな「自分の年表」を作ってみましょう。

本屋さんに行くと、書き込み式の立派な自分史用の年表を売っています。エッセイ集スタイルのコンパクト自分史の場合は、そんな詳しい年表は要りませんが自分の過去の出来事を思い出すために、生まれた年から今まで、各年1〜2行程度の、メモ式年表を作っておくと、なにかと便利です。

テーマ数は10〜20程度 各4〜6ページくらいが目安

コンパクトとはいえ、自分史の体裁を整えるために、どのくらいエッセイのテーマ数が適当でしょうか。

その目安をつけるにあたって、まず、どんなサイズの冊子にするかをきめることにします。

前ページ上の写真のサンプルは、文字通りコンパクトでおしゃれな感じにするために、A5用紙(A4のコピー用紙の半分＝縦14・8センチ横21センチ)の横を3センチカットして18にしてみました。このサイズはDVDのプラスチックケースを一回り大きくした感じで、コンパクトな印象を与え、しかも文庫本の書籍より読みやすい文字、行間にできます。

もちろんこのサンプルのサイズにこだわることはありません。手作りなら、どんなサイズもお好みしだいです。ただ、製本の作業上、既存の用紙サイズを活かし、一部カットする程度にしたほうが手間が省けます。

このサンプルでは、エッセイのテーマ数が12、テーマごとの文章部分が各4ページ(文字数1920)、写真イラストが各2ページ。前文と奥付を含めた「本文」が76ページとなっています。

このページ数では貧弱なものになってしまうのではと感じられるかもしれませんが、本文に厚口の用紙を使い、これに「見返し」、厚紙の「表紙」、カラー写真刷りの「カバー」で装丁すれば、見栄えも、ボリューム感も十分です。(手作りの仕方は最終ページをご覧ください。)

サンプルを参考にすれば、エッセイのテーマ数は10〜20項目程度、テーマごとの文章(写真、イラスト部分を除く)は、4〜6ページ(文字数にして1600〜2700)程度が目安でしょう。

この程度のページと文字数で書き尽くせるだろうかと思われるかもしれませんが、でも、長いスピーチが嫌われるように、だんだら長い文章より、短いほうがずっといいのです。

ぜひ参考にとお奨めしたいのが日本経済新聞の朝刊文化欄の「私の履歴書」です。様々なジャンルの方々が自分の半生を語るものですが、どんな有名人でも、一人につき毎日1346文字、1カ月間連載ときめられています。例えば、かつて登場した李香蘭こと山口淑子氏。あれだけ波瀾万丈の体験をした方でも、このくらいに収まるというお手本です。購読されてない方も、駅の売店で買ってご覧になってください。とにかくムダをそぎ落とし、スリムにすることを心掛けましょう。